

• 会報第15号の発行によせて •

今回の特集は、今年の7月31日～8月12日まで京都市美術館にて開催される『日本・英国 国際版画展』に合わせ、英国側のキュレーターで作家のレベッカ・ソルタ氏に英国の版画について伺い、本展の巡回先である北九州のお話を角間貴生氏に聞きました。また、2月にポーランドで開催された『日本・ポーランド国際版画展』の報告を3名の方に伺いました。

それぞれ大変興味深い内容です。ごゆっくりとお読み下さい。



◆ Katherine Jones
“the vanishing land”
H71×W68cm
collagraph・relief
2010

◆ Rebecca Salter
“into the light 1”
H47×W77cm
woodcut
monoprint
2011



◆ Ruth Uglow
“freefall”
H73×W14cm
etching
aquatint
drypoint
2005

■特集① 英国の版画について — レベッカ・ソルタ —

■特集② 『日本・ポーランド国際版画展』 カトヴィツ 報告

- カトヴィツ展について
- 中欧ポーランドの旅
- 彫師から見たポーランド

- たなか 玉実 —
- 濱本 澄江 —
- 北村 昇一 (木版画彫師) —

■ 『日本・英国 国際版画展・北九州展』にいらっしゃいませんか? — 角間貴生 —

■ 活動報告

■ 揭示板



【英国の版画について】

写真提供：レベッカ・ソルタ

Rebecca Salter
レベッカ・ソルタ
木版画

Interview



私は京都に住んでいたので、その都市と歴史にとても親しみを持っています。今回の展覧会に参加する芸術家たちは、その京都で作品を展示する機会を与えられたことにとても刺激を受けています。京都は美術工芸に関して他に類を見ない歴史があり、イギリスの芸術家たちはそのような洞察力のある鑑賞者からの反応に対して大きな興味を抱いています。北九州を訪れたことはありませんが、きっと興味深いリアクションを得る第一の場所になるでしょう。

モニカ・ペツツェル（私の共同キュレーター）と私は、私たちがイギリスで集めた作品にとても愛着を持っており、日本の芸術家の作品と共にイギリスの作品が展示され交流が生まれることを楽しみにしています。展覧会はいつも予期していない個人的かつ芸術的な偶然の出会いを与えてくれますが、それが起こることを私は願っています。この展覧会を通じてイギリス・日本両国の芸術家の交流が次の段階へと発展していくならば、それはきっとすばらしいことだと思います。芸術的な偶然の出会いを与えてくれますが、それが起ることを私は願っています。この展覧会を通じてイギリス・日本両国のお家の交流が次の段階へと発展していくならば、それはきっとすばらしいことだと思います。



Q1・イギリスには多くの版画家が在住していますが、日本で展覧会を開催するためにどのような基準でアーティストを選びましたか？

多くの芸術家が日本の版画の伝統に影響を受けていることもあります。日本での展覧会のためにイギリスの版画の選出を頼まれたのはとても光栄に思う次第です。私たちは特定の世代や技術を制限しないように決めていました。老若男女を問わず、そしてキャラクターにおいて異なる段階にいる芸術家を参加させるために努めました。多くの芸術家たちが年齢を重ねてから版画に関わることはとりわけ重要なことであります。でもかかわらず、彼らは単に年齢の理由で選ばれずにいる状況があります。

私たちの選出は今日のイギリス版画界に於いて幅広い見解を提示しています。技術に対する理解やその歴史的役割に対する敬意を示しているが、同時に、実験を試み従来の概念を覆そうとする柔軟な意識があらわれています。そういった意図が選出された作品には共通して内在していると思います。

Q2・日本で開催される展覧会についてどのような期待をお持ちですか？

Q3・今日のイギリスの版画界にはどのような傾向があると思いますか？

伝統的にイギリスには数々の大学の美術学部に版画コースがあります。しかし最近は、版画コースを閉じてしまう大学もあります。大学院においても同様の変化が見受けられます。版画の設備が大学で存続することは重要なことであり、専門家を育成するコースを除外するのは恥ずべきことだと思います。学ぶべき価値のある技術を獲得する「版画」はユニークな造形思考への道筋があります。

大学の他にも、多くの人々は版画工房の教室で版画を習っています。これは気軽に版画を学ぶにはとても有効な方法であり、更に深く版画を学びたいという人たちに、大学の版画コースへの登録を促すという結果にも繋がっています。特に彼らは他の学生と共に学べる機会にも恵まれ、有益で重要なセミナーやレクチャーに参加することで彼らの作品の質の向上にも結びついています。版画工房と大学を行って運営させることでイギリスにおける版画教育は健康的であると言えます。

イギリスと日本の版画に違いがあるかについては確信がありません。しかし版画を取り巻く環境には相違点があるだろうと思います。私は日本の伝統的な木版画職人を研究してきましたが、その制度は独特なものです。アーティストのために部数限定の版画を制作しているイギリスの版画工房はいくつありますが、それらは大きなスケールの商業的なものであり、個人の版画工房ではありません。イギリスと日本、この二国での版画市場における大きな違いがあるかについては疑問を感じます。

イギリスのアート・マーケットの領域は日本よりも大きいと思いますが、版画家を取り扱うギャラリーは日本の方が多いかもしれません。ロンドンはアートワールドの主要な中心地なので、世界的に有名なアーティストに部数限定の版画を依頼するいくつかのギャラリーがあり、一方、版画家の作品のみを展示しているギャラリーもあります。そして場合によつては、版画家たちはまた他の芸術家のために部数限定の版画を制作していることもあります。

Q4・どのようにイギリスでは版画が教えられていますか？

教育はとても重要です。コレクターは「版画とは何か」、そしてアートワールドとアーティストのキャラクターにおける版画のポジションの重要性を理解する必要があります。一時期、デジタル画像は確かに物事を混乱させましたが、デジタルは版画に適切だと考えられる技法の領域に入ったのだと思います。芸術家は、彼らにとって正しいと思う手法で制作する自由を重んじますし、また彼ら自身の工房もそのような方向で整えています。

様々な意味において、イギリスの版画界は流動的な状態にあると言えます。版画は今でも人気を維持していますが、それが見られている文脈は常に変化しつつあるというのが公平な意見かと思われます。芸術家は作品を売るためにアート・マーケットに頼っています。しばらくの間、版画専門のギャラリーはありましたが現在はほとんど消滅してしまいました。しかしこの状況は今では変わり、堅実な情報や知識を提供するインターネットによって、新しいコレクターが出てきています。



『日本・ポーランド国際版画展』

カトヴィツ報告

●カトヴィツ展について ● たなか 玉実

初体験。カトビイツ空港に着いたのは夕刻、マイナス一四・五度。オー、冷える！ ただ、頬は冷たくなるが、無風なので口は滑らかに動く。人間はたくましい。その夜から連日、カトビイツ国立芸術アカデミーの人たちの歓迎を受け、巨大皿に盛られた料理に、私たちは常時満腹、ブロイラーニ化するのだつた。まだオー・ブニングは二日後。翌朝は粉雪舞う銀世界、マイナス一九度。炭鉱跡の立派な住居群の見学、凍つた道をざくざくと歩く。寒さも一段と厳しくなつた午後遅く、Tychyビール醸造所に着いた。広大な敷地に点在する各施設を、雪の中、歩いて巡る。案内の女性が、立ち止まり説明をする。顔が凍え、手先、足先がじんじん。夕闇が迫り、無情にも雪まで激しくなつた。思わず私は口走る。「こ、これは、八甲田山、イン、カトビイツだ！」



◎ 亂世遺稿



③カトビツ・ラウンドアバウトギャラリー オープニング

写真提供①②⑤：三上景子
③④：村井紳造

みもあるが、なんだか落ち着かない。壁面が赤いのだ。額の中の縁取りマットは黒。絵が小さく見える。一壁面ずつ、ポーランドと日本作品が交互に飾られ、ポーランド作品は赤いキャブションを付けて、白い壁面に。比較しやすいが、ポーランド作品のほうがよく見えるのは、気のせいかな。オープニングが始まつた。正面、黒崎先生と小林敬生さんとの絵の間に三上景子さんの絵が飾られた。そのまん前で、アカデミーの学長、SMTG(トリエントナーレ)委員長、そして黒崎先生の簡単な挨拶と、日本の作家紹介。一人ずつ順不同。同行の皆も紹介される。テレビの撮影。カメラの放列。淡々としてあつという間に終わる。来られなかつた仲間の作品を探し回り、カメラに収めていると、集合がかかり、人々に次の招待ディナー会場へ。ゆつくり楽しむ間のない、あわただしいカトビイツ展であつた。



②カトヴィツ国立芸術アカデミーリトグラフ工房

●中欧・ボーランドの旅●

氷点下一九度、頬を刺すような張り詰めた空気。二〇一二年二月八日、黒崎氏を団長とする総勢一六名のポーランドの旅は始まった。

最初に訪れたのは炭鉱で栄えた街カトビツ。占在する広場、背の高いスプルースの樹々、うつすらと積もる雪。犬の散歩の風景にブリューゲルの「雪の中の狩人」を思い起こす。

A group of approximately 15 tourists, mostly from East Asia, are posing for a group photo in front of the Barbakan in Krakow. They are dressed in heavy winter clothing, including coats, scarves, and hats. The background features the historic Barbakan gate, a large brick structure with multiple arched windows and a prominent tower topped with a green and yellow flag. To the right, a classical building with columns is visible.

今回のツアーでは浮世絵展を二つ見ることが出来ました。一つはクラクフ、日本文化センター「FUJI」展。北斎と併せて、北斎に影響を受けた現代作家の作品も展示されました。その中に富嶽三十六景山下白雨を描いた作品があつたのですが、その作品の左下に松林が描かれていました。これを見たとき私はかなり驚きました。と言うのも一般に知られる北斎のものには松林はありません。しかし私が以前コレクターに見せていただいた山下白雨には松林が摺らされているものがあつたのです。その時同席していた同業者全員が始めて見たと驚いていました。つまりこの作家は、その珍しい松林有りのものを見ていたということになるからです。

この街では一九三〇年代の直線的な近代建築、鉱夫が住んでいたという赤い窓枠のアパート群、そして国立芸術大学を見学。大学では版画技法別に責任者からの丁寧な説明を受ける。同じ技法でもお国が違えばやり方も多少違うよう。そして本来の目的であるカトビィツ展オープニングパーティーに出席。静かな印象のこの街で、初めて大勢の人を見かける。老若男女が極東の国の作品に魅入っている嬉しいかぎり。

その後文化の街クラクフに移動。浮世絵のマンガ美術館、リゾート地ザコパネ、そして美しい旧市街の散策。この旅の初日から連日大学関係者、SMTC関係者の歓迎を受けるのが、ボラノーヴィーはな



⑤クラクフ
日本文化センター
「F U J I 展」

●彫師から見たボーランド●

○『日本・英国 国際版画展・北九州展』に いらっしゃいませんか? 角間 貴生 ○

「えー、北九州市…それってどこ? あーそうそう、昔、北九州工業地帯つて習ったことあるよね。」北九州と聞くと決まってこんな答えが返ってくる。全国的には北九州って本当に認知度の低い都市なのだ。福岡県内でも若い女性たちは「あんなヤクザの多い怖いところはいや…」と言って、こぞって福岡市の方に移住してくるし、イメージは決して良いとは言えない。むかし、門司、小倉と戸畠、八幡、若松を無理やりくっ付けて百万都市にしたというのに、その後、多くの工場は移転していくし、人口は減って年寄りばかり多くなるし、街なかはどこかくすんでいて…どうも九州人の評価も今ひとつなのだ。でも、いまだ九州人になれない北陸生まれのぼくには、北九州はとても魅力ある街と言って良い。一見華やかな「ミニ東京」の福岡よりはずっと奥が深い文化都市というのが、ぼくの北九州イメージなのだ。



まだ不遇時代の松本清張が子供を連れて夜の皿倉山に上り、北九州市内の無数の灯りを見ながら、あちこちの星座をわが子に教えているエッセイを読んだことがある。たしかに、北九州は前に海が広がり後に山がせまつていて、神戸のように起伏の多い美しい詩的な街なのだ。森鷗外、林芙美子、火野葦平、松本清張といった個性的な作家たちの独特な感性を育んだ所だし、今も画家や詩人や演劇人たちが色んなサークルを組んで活発に活動しているとても文化的な町と言って良いだろう。さらに忘れてならないのは、今や最先端の循環型（リサイクル）社会・エコライフ社会を目指す環境モデル都市でもあり、ライバルの福岡なんぞに負けてたまるかと絶えず奮闘してはいつもくじけてしまう?…いじらしい都市でもあるのだ。

平家物語のあの壇ノ浦を見やる関門海峡の風景は絶景である。そして若戸大橋を渡す洞海湾を背景に工場や船舶の煙突・鉄骨群がオーバーラップした風景も圧巻である。磯崎新設計の立派な市立美術館からはそんな美しい風景が一望でき、版画展の開かれるアネックス前にはフランク・ステラの巨大鉄オブジェも私たちを迎えてくれる。

あなたも是非、そんな詩的で魅力ある北九州にいらっしゃいませんか。



版画京都展実行委員会

活動報告

展覧会名：京都版画 2012 新鋭展

日 時：2012年2月21日（火）～3月4日（日）

会 場：JARFO

会場住所：〒605-0023 京都市東山区三条通東大路東入今小路町81

出 品 者：石井誠、石塚恵子、謝敷ゆうり、白井かづよ、中垣満
松岡恵子（50音順）

新規会員の有志が参加した新鋭展は、新会員の自己紹介を兼ねた場でもあり、それぞれの個性をしっかりと印象づけた展覧会となりました。版種、技法は様々でしたが、密度の高い作品や、変わった質感の作品が多くあり、足を止めてじっくり見ているお客様もたくさんいらっしゃいました。

お忙しい中、ご来場頂いた皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

（文：写真撮影／謝敷ゆうり）



展覧会名：第79回版画協会展：受賞者展

日 時：2012年1月30日（月）～2月4日（土）

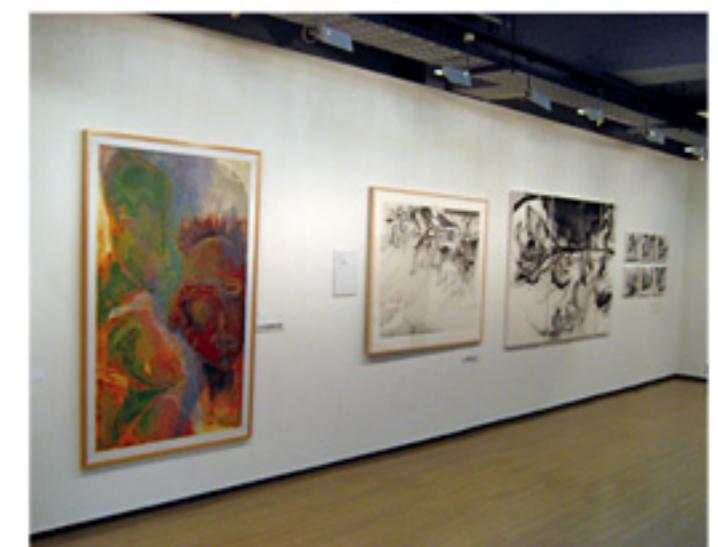
会 場：シロタ画廊

会場住所：〒104-0061 東京都中央区銀座7-10-8 第五太陽ビルB1F

出 品 者：ツツミアスカ 他7名 ※当委員会メンバーのみ記載

展示壁面は一人あたり7～8メートルとゆったりとしており、とてもすっきりと見やすい展示でした。出品者全員が受賞者ということもあって、作品の完成度とクオリティーの高さはさすがと言った感じでした。また、こういった若手の作品を見ると、現在の準会員や会員は、作品制作にあたりどこか怠慢になってないだろうか?と指摘をされた会員の方がおられました。関東が母体である日本版画協会は、関東の若手に比べると関西の若手はどうしても不利になってしまふといった内容のお話が聞けました。お話を頂いた作家さんの個々の意見は違いますが、版画の今後について皆さんが真摯に考えておられました。

（文：写真撮影／ツツミアスカ）



掲示板

会報にお寄せいただいた版画京都展実行委員会メンバーの展覧会情報です。

詳細は会場へお問い合わせください。

●川端千絵

<川端千絵 新作木版画展>

会期：2012年10月2日～10月7日

場所：ギャラリー恵風 〒606-8392

京都市左京区丸太町通東大路東入ル南側

TEL：75-771-1011

●武田あづみ

<武田あづみ個展(仮)>

会期：2012年11月27日～12月2日

場所：ギャラリー恵風 〒606-8392

京都市左京区丸太町通東大路東入ル南側

TEL：075-771-1011

●林葉子

<林葉子個展>

会期：2012年11月22日～11月27日

場所：OLD BOOKS & GALLERY SHIRASA

〒650-0022 神戸市中央区元町通2-7-5

TEL：078-321-0801

●ふじいみよこ

<ふじいみよこ 銅版画＆アクリル展>

会期：2013年1月10日～1月15日

場所：ギャラリー尋屋 〒460-0008

名古屋市中区栄3-31-3 コンフォレスト尋屋ビル5F

TEL：052-262-6800

●黒崎彰・小林敬生・ツツミアスカ

二階武宏 他10名

<New Horizons in Contemporary

Japanese Woodcuts 2012>

会期：2012年9月10日～10月10日

場所：Galeria Prymat, Krakow

Łobzowska 3, Kraków, Poland

TEL：+48 12 632 46 22

編集後記

この会報が発行される頃は暖かくなっていることを願っていますが。。。しかし、この冬は寒かった! インフルエンザにこそからなかったものの、2回も肺炎になりかけるは、いきなり貧血で倒れるはで、改めて自分は寒さに弱い生き物であることを認識させられました。皆様、体調にはお気をつけ下さいませ。

会報担当：ツツミアスカ（編集）、三上景子、竹本千明 発行：版画京都展実行委員会 問い合わせ先（事務局）：075-956-6910

